

『観念法門』における三昧思想について

五十香正 宏

『観念法門』は、「三昧行相分」、「五縁功德分」、「結勸修行分」の三段よりなっている。この内「五縁功德分」については、その冒頭に「依經明五種増上縁義一卷」という標題が置かれてあることから、これを『観念法門』とは独立した書物と見なし、『五種増上縁義』一卷とする説がある^①。そこで善導の三昧思想を「三昧行相分」と「五縁功德分」に分けて見ていくことにする。

「三昧行相分」は観仏・念仏両三昧について述べられてある。まず観仏三昧については標列に「依觀經明觀仏三昧法一」と示される部分に説明がなされてある。ここでは『觀經』・『觀仏三昧海經』の意によって、行者は昼夜を問わず、行住坐臥にも阿弥陀仏を觀想しなければならないとし、また行者が座して觀想する時には、結跏趺坐して阿弥陀仏の相好を上は頂上の螺髻から下は足の千幅輪相に至るまで繰り返し觀想すべきであることが述べられている。この観仏三昧は、「淨土の中の事を見ることを得」（六八二^②）とあるように見仏を目

的としたものである。しかし「常に此の想を作せば、太だ障を除き罪を滅す」（六七九）、「此の想を作す時、罪障を除滅し無量の功德を得…日夜に身に随ひて行者を影護す。行除坐臥に常に安穩を得、長命富樂にして永く病痛無し」（六八二）とあるように、観仏三昧の功德としての滅罪、護念得長命の利益も述べられている。また「若し教門に順ずれば、命終の時に臨みて阿弥陀仏國に上品往生す」（六八二）とあるように、観仏三昧とは、上品往生するための法であるとも見られる。以上のことから観仏三昧の法とは、定善十三觀を見仏を目的としながら修し、滅罪、護念等の現生の利益を得た後、淨土に上品往生することであると考えられる。

次に念仏三昧については標列に「依般舟經明念仏三昧法二」と示される部分以降に説明がなされてある。まず「依般舟經明念仏三昧法二」と示される部分には、『般舟三昧經』一卷本の「問事品」と「行品」を引用してこれを説明している。なお行を修する対象である「菩薩」という語句を「四衆」等

と改めた以外は、ほぼ原文通り『般舟三昧経』を引用している。これによると念仏三昧の法とは、大信を立て持戒を具し独り一処に止まって西方の阿弥陀仏を念じ、見仏することである。ここでの念仏三昧の「念」の意は、「色を壊せざるが故に仏の色身を念ずるに由るが故に、是の三昧を得」（六八九）とあるように、観仏三昧の「観」の意と等しいものであると思われる。しかし次の「依経明入道場念仏三昧法三」と示される部分には、「道場の中に於て、昼夜に心を束ね、相續して専心に阿弥陀仏を念ぜよ。心と声と相續して……」（六九〇）とあることから、念仏三昧の「念」の意が「観」の意のみではなく称名の意も含まれていることが知られる。また浄土往生について、先の「依般舟経明念仏三昧法二」と示される部分には、阿弥陀仏の言葉として「来生せむと欲せば、当に我が名を念すべし」（六八九）とある。この「当念我名」は称名と解釈する説や意念と解釈する説等があるが、いずれにせよ先に見た念仏三昧の範疇で捉えられる行である。以上のことから念仏三昧の法とは、観想・称名を併修することにより見仏し浄土往生することであると考えられる。このように「三昧行相分」において観仏・念仏両三昧を見ていくと、観仏三昧には称名の意が含まれていないものの、両者は同質の三昧であることが知られる。

次に「五縁功德分」を見ていくことにする。ここでの善導

の三昧思想は、見仏三昧増上縁の説明の中で述べられている。ここで善導は三昧について、

「三昧と言ふは、即ち是念仏の行人心口に称念して更に雜想無く、念念心を住め声声相續すれば、心眼即ち開けて、彼の仏了然として現じたまふを見たてまつることを得。即ち名づけて定と為し、亦三昧と名づく。」（七〇八）

と明確に定義している。これは「三昧行相分」に説いてある念仏三昧と思想的に同じであると言える。しかし「五縁功德分」には三昧について他にも「定心三昧」、「口称三昧」、「一行三昧」という表現があり、また行についても観想のみを説く場合、観想・称名の併修を説く場合以外に「相貌を取らず専ら仏名を称して」（七〇九）とあるように称名のみによつても見仏が可能となるとしている。このことから「五縁功德分」にある三昧すべてが「三昧行相分」にある観仏・念仏両三昧と思想的に同じであることは出来ない。また善導は「五縁功德分」において、見仏が三念願力によつて可能となることを強調している。善導の説く三念願力とは、大誓願力・三昧定力・本功德力のことである。これは『般舟三昧経』一巻本の「持仏力。三昧力。本功德力。用是三事故得見。」という文によつたものである。『般舟三昧経』当面からすると三力の中、仏力は仏側の力、他の三昧力・本功德力は行者側の力であると考えられる。しかし善導はこの三力を「弥陀仏

の三念願力」と表現し、すべて仏側の力であるとしている。この阿弥陀仏の三念願力によって、心想が劣である凡夫であつても、見仏が可能となるのである。

以上のように「三昧行相分」と「五縁功德分」とに分けて善導の三昧思想を見てきた。「三昧行相分」にある観仏・念仏両三昧と「五縁功德分」に説いてある行は、すべてが同じであるとは言えないが、相違するものでもない。そして先に見たように「三昧功德分」においても「五縁功德分」と同様に、見仏以外にも浄土往生・滅罪・護念得長命の利益が説かれてある。このことから「五縁功德分」を「三昧行相分」にある観仏・念仏両三昧の功德法門を明かしたものであると見なせば、両者は同一の書物としても問題はないであろう。ところが先述したように「五縁功德分」には、「三昧功德分」で明らかにされていない阿弥陀仏の三念願力が強調して説かれてある。これについて両者の著述時期が異なると仮定すれば、「五縁功德分」は思想的に発展していると言うことも出来るであろう。また著述時期を問題としなくとも、行を修する対象が両者の間で異なるために、阿弥陀仏の三念願力が強調されたと考えることも出来る。「五縁功德分」はその最後に述べられてあるように、阿弥陀仏が一切罪惡の凡夫から聖人に至るまでいずれの者も摂して浄土に生ずることを得しむる、ということをも証明したものである。したがって三昧を修す

る者は、心想が劣である凡夫から聖人までがその対象となっていると考えられる。それに関連してか、説かれてある行も観想のみを説く場合、観想・称名の併修を説く場合、称名のみを説く場合と一様ではない。しかし阿弥陀仏の三念願力によつて、いずれの者であつても、いずれの行であつても見仏が可能となるのである。これに対し「三昧行相分」は、三昧を修する者に凡夫という語句を用いず行者、四衆等と表現し、称名のみを行を説いてはいない。このことから「三昧行相分」は「五縁功德分」に比べ特定された者を対象に述べられているものであるとも考えられる。「三昧行相分」と「五縁功德分」を同一の書物とする場合には、このことを留意すべきであろう。

- 1 望月信亨『支那浄土教理史』一八四頁
- 2 以下、括弧内の数字は『浄土真宗聖典・七祖篇』の頁数。
- 3 『大正蔵』一三・八九九頁
- 4 藤原幸章『観念法門』について『大谷学报』三七・三三頁
- 5 藤原凌雪『善導撰述の成立前後について』『印仏』三・二六八頁

〈キーワード〉 善導、念仏三昧、観仏三昧
(龍谷大学大学院研究生)